



◇◇◆◆◇◇ 国際通貨研究所メールマガジン（第24号 2014/3/10発行）

◆◆◇◇ Institute for International Monetary Affairs (IIMA)



<http://www.iima.or.jp/>



※本メールは配信専用のアドレスからお送りしております。

返信をいただいても当方では受け取ることができません。

閲覧には Adobe Reader が必要です。

Adobe Reader のダウンロードはこちらから→ <http://get.adobe.com/jp/reader/>



1. 理事長 行天豊雄のコラム 『人民元のジレンマ』

久しぶりに人民元相場がマーケットの関心の中心に戻ってきた。つい2週間前迄人民元は一番安定していて話題性の少ない通貨だった。大きな経常収支の黒字、欧米からの元安操作批判、中国政府の人民元国際化計…

(株式会社マネーパートナーズへの寄稿)

(全文はこちらから)

<http://www.iima.or.jp/Docs/merumaga/2014/20140310gyoten.pdf>



2. 専務理事 渡辺喜宏のコラム 『アベノミクスと経常収支～円安の原因と功罪』

昨年は、円安、株高、財政出動を主因として、企業収益・家計の消費動向は総じて改善した。企業には国内での売上増と円換算の海外収入の増加が収益増加をもたらした。又株・外貨建て資産を持つ家計に資産効果…

(IIMA メールマガジンへの寄稿)

(全文はこちらから)

<http://www.iima.or.jp/Docs/merumaga/2014/20140310watanabe.pdf>

■ 購買力平価グラフの更新

<http://www.iima.or.jp/research/ppp/index.html>

■ 今月の新着レポート

1. 「構造改革推進により成長率押し上げを図るメキシコ」

メキシコは、1980年代の累積債務危機を契機に、対外開放路線に大きく舵を切り、以来、市場志向的な政策を推進してきた。2012年12月に就任したペニャ・ニエト大統領は、就任直後に主要野党と締結したメキシコ協定に沿って、構造改革推進に必要な法律の整備を着実に進めてきた。一連の構造改革推進はメキシコの経済成長率を1~2%程度押し上げる可能性がある。一方で、最大のリスク要因として治安の悪さが挙げられる。

http://www.iima.or.jp/Docs/newsletter/2014/NL2014No_12_j.pdf

2. 「ユーロ圏経済の現状と展望 ~周縁国は債務危機からの脱却なるか?~」

2009年後半からソブリン危機に揺れた欧州金融市場は2012年夏場を境に落ち着きを取り戻し、足下でも小康状態にある。債務問題をかかえる周縁国は、個別にみれば問題は残るが、財政再建を着実に進展させてきた。ユーロ圏各国の対外不均衡も縮小傾向が続いている。今後は債務国の長引く景気低迷を背景としたデフレリスクと、失業の長期化による政治不安が懸念材料である。景気低迷の長期化は金融機関の不良債権増加、さらなる財政悪化を通じて、財政再建計画を頓挫させるリスクがある。

http://www.iima.or.jp/Docs/newsletter/2014/NL2014No_11_j.pdf

3. 「トルコ経済の現状と注意点 ~中東における相対的優位は不変ながらリスク要因は増加~」

トルコは、経済の拡大基調と相対的な政治・社会情勢の安定性を背景に、中東において依然として優位にあるが、政情リスクは増えており信用状況は低下している。経済、治安、政治に関する主なリスクは、①高水準の経常赤字と対外債務残高、②隣国シリアの治安の悪化と同国からのクルド人難民の流入の悪影響、③エルドアン政権への不満を背景とした反政府デモ再発の虞の3点である。トルコリラ相場は、購買力平価でみる限り依然として割高であると判断されるため、今後さらに下落する可能性はある。

http://www.iima.or.jp/Docs/newsletter/2014/NL2014No_10_j.pdf

4. 「米国金融緩和の縮小を受けた市場の動揺について」

年初から揺れる国際金融市場の背景を、過去4~5年の世界経済で進行していた様々な現象に遡り、今回の相場の揺れは、個々の国に蓄積したファンダメンタルズの問題に沿っ

た形で起きたものであることを解説。

http://www.iima.or.jp/Docs/newsletter/2014/NL2014No_9_j.pdf

5. 「次に注目すべき中国の地方政府債務はBT？」

2013年12月30日、中国の国家審計署は「全国政府性債務審計結果」を公表した。また、2014年1月には、チベット自治区を除く全ての省級地方政府がそれぞれの「政府性債務審計結果」を公表している。調査結果からは、中国の地方政府性債務の規模は、コントロール可能な規模であることが示されていると同時に、地方政府性債務の借入主体や資金調達手段の変化から、今後動向を注視すべきBT（Build-Transfer）などの新たな課題も浮かび上がってきている。

http://www.iima.or.jp/Docs/topics/2014/250_j.pdf

6. 「ビットコインの仕組みと課題」

発明者が誰なのか、運営母体はどこなのか、謎めいた部分の多い仮想通貨のビットコイン。昨年来、急速に存在感を強め、その発行規模や価格の激しい変動が注目を集めているが、その基礎的な仕組みを解説するとともに、通貨としての限界や課題などについて論じる。

http://www.iima.or.jp/Docs/newsletter/2014/NL2014No_8_j.pdf

7. 「アルゼンチンにおける介入主義の源流 ～今も残るペロンの政治的遺産～」

2014年に入り、アルゼンチンペソが急落した。ペソ急落の主因は、極端なインフレにある。同国政府は、オーソドックスな景気引き締め策を採らず、賃上げを容認し、一方で価格統制に走るなど、非正統的（ヘテロドックス）な経済政策に傾斜している。アルゼンチンはなぜヘテロドックスな政策を好むのか。これを明らかにすることが本稿の目的である。

http://www.iima.or.jp/Docs/newsletter/2014/NL2014No_7_j.pdf

8. 「オマーンの現状と課題 ～脱石油ガス依存に向けた課題～」

オマーンは湾岸諸国の中では石油ガス資源が少ない国であるが、近年、シェールガスが発見され可採埋蔵量は増加している。しかし、いずれ資源枯渇は免れることはできず、脱資源経済のため、産業の多様化を図っている。ホルムズ海峡の外側に位置しているオマーンは、港湾を整備し、海運ビジネスを振興することを狙っている。政治的には比較的安定しているオマーンだが、王位継承問題が潜在的なリスクとなっている。

http://www.iima.or.jp/Docs/newsletter/2014/NL2014No_6_j.pdf

9. 「インドの食料インフレはなぜ高止まりしているのか 」

景気減速にもかかわらず、インドのインフレ率は高止まりしており、インド政府、中央銀行の政策対応を難しくしている。インフレ率高止まりの主因は食料価格の高騰である。本稿は、インドの食料インフレの背景について解説する。

http://www.iima.or.jp/Docs/topics/2014/249_j.pdf

■今週のキーワード

- ★トロイカ支援
- ★地政学的リスク
- ★テーパリング
- ★BT (Build-Transfer)
- ★仮想通貨
- ★正統的経済政策

レポートに関連する専門用語の参照はこちらから

<http://www.iima.or.jp/Docs/keyword/keyword.pdf>

■今月の IIMA

今月は 19 日に IIMA 主催の国際金融シンポジウムが開催されます。今年は「真の夜明けに向けて～世界経済の成長のための政策と課題」がテーマです。黒田日銀総裁を始めとして、スバラオ前インド準備銀行総裁、ラインハート モルガン・スタンレー チーフ U.S. エコノミストなど日米欧中印、各地域から著名な専門家をお招きしています。各パネリストには、各国経済の現状、政策対応の適合性、他の地域への影響、そして個々の政策がうまく進んだときに、グローバル経済はどう変わっていくのかを議論していただきます。既に申込は締め切らせて頂いておりますが、申し込まれた多数の方々のご参加をお待ちしております。また当日いらっしやらない方も、後日、議論の内容をまとめてホームページに掲載いたします。

3 月は年度末ということもあり、各研究員は様々な受託調査の最終的なまとめで忙しくしております。これらの調査については、そのエッセンスを IIMA のサイトに順次掲載してまいります。どうぞご期待下さい。

【バックナンバー】

<http://www.iima.or.jp/mailmagazine.html>

【次号】

2014年4月10日配信予定

【メールマガジンの配信停止・配信先変更】

<https://m.entryform.jp/m/iima/>

【各種お問い合わせ】

admin@iima.or.jp

◇発行◇*****

公益財団法人 国際通貨研究所

〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町 1-3-2 三菱東京 UFJ 銀行日本橋別館 12 階

[HP] <http://www.iima.or.jp>

***** Copyright (C) IIMA All Rights Reserved. *****